雑草図鑑
タネツケバナ・スズメノテッポウ

4月の農作業

タネツケバナ

種子で繁殖する田畑共通の越年生広葉雑草。畑地、庭、道端などに生育する。出芽の限界深度は2cm前後。ごく浅いところからの発生が多い。田などの湿性がかなり高い場所に生育し、秋に発生しロゼット場で越冬。翌春に急激に成長する。茎は分枝し高さ15～30cmになる。葉は根もとに多く集まり、羽状に深く切れ込む。3～5月に茎の先に多数の白い小花が並んでつき、穂のようになる。水田一面に花を咲かせることがある。稲のもみをおろす頃に花をつけることからこの名がついたと言われる。

水田を埋めるタネツケバナ

タネツケバナ（生育初期）

タネツケバナ（花）

防除のポイント

移行性の茎葉処理剤ラウンドアップマックスロード（作物によって使用方法が異なるため要確認）を早春に散布する。種子が飛散するので、成熟する前に刈り込みを行い種子を付けさせないようにすることが大切である。

スズメノテッポウ

スズメノカタビラとともに春の代表的なイネ科雑草で、畑地、水田、道端などに生育する。発生量も多く強害草である。耕起前の水田一面に密生し、大きな群落をつくることがある。肥沃な酸性土壌によく生育する。秋に発生し、線形の細い葉を出して越冬する。春に分げつして株になり、茎は高さ20～40cmになる。3～5月に茎先に円柱状の花穂を出す。花穂には雄しべの一部で、花粉を作る器官である黄褐色の葯（やく）がつき目立つ。開花後20日以降になると発芽能力を持った種子ができる。

スズメノテッポウ（生育後期）

スズメノテッポウ（花穂）

スズメノテッポウ（黄褐色の葯）

防除のポイント

開花、結実する前の早春期頃までに反転耕かくはん耕等の防除で、次回の発生源となる種子形成を抑えることができる。刈り払いでも防除可能であるが、株元から再生があるため複数回の防除が必要になる。

裏面は代かきと初期除草剤の注意点を掲載しています。

代かきと初期除草剤の注意点

4月の農作業

■代かき作業のポイント

代かきには、田んぼの表面を柔らかく均平にし田植えをしやすくする。水持ちを良くし、除草効果を高める等いろいろな役割があります。

次のことに注意し作業を行ってください。

- 耕うん作業は一定の深さ（12～15cm）で平らに、残耕のないように行う。
- 代かきを行う際の水深は、耕うんした土壌が少し見える3～5㎝程度。水量が少ない場合、代かきがしにくくなります。反対に水量が多い場合、水で土が移動して均平が悪くなります。
- 代かきをやりすぎると土が詰まり、土壌中が酸素欠乏となり根腐れの原因となります。代かきのやりすぎには注意してください。

■除草剤を効果的に使用するために

安定した効果を得るためには次のことが重要です。

①田面を均平にする
②代かきを丁寧にする
③気温の低い日は散布を避ける
④除草剤の使用量・使用時期を守る

また、水管理については、十分に水を張った状態で散布し、散布後は7日間落水やかけ流しをしないようにしてください。田面が露出すると安定した効果が得られず、露出個所から雑草が発生する原因となるため、水を十分に確保するようにしてください。

農薬使用の際は必ずラベルを確認し、使用基準を守って使用しましょう。基準通りの散布をしなければ、出荷ができなくなります。安全で安心な水稲栽培に取り組むため、下記の基準通り除草剤を使用してください。

水稲初・中期除草剤使用基準

1回処理剤

■パットフルエースLジャンボ【ジャンボ剤の場合】（1袋10パック入り）

〈使用基準〉
- 10a当たり10パック使用
- 田植後1～7日（ノビエ2.5葉期）まで
- 使用回数：1回まで

※風の強い日は避けて散布する

■トップガンGT1キロ粒剤51【粒剤の場合】（1袋1kg入）

〈使用基準〉
- 10a当たり1kg使用
- 田植時～9日（ノビエ3葉期）まで
- 使用回数：1回

2回処理剤

（1回目）

■ショキニーフロアブル（1本500ml入り）

〈使用基準〉
- 10a当たり500ml使用
- 田植時～田植後3日（ノビエ1葉期）まで
- 使用回数：1回

※2回処理体系の1回目薬剤、ショキニーフロアブルは田植え日からの使用となり、代かき前には使用できませんのでご注意ください。

（2回目）

■マメットSM1キロ粒剤（1袋1kg入）

〈使用基準〉
- 10a当たり1kg使用
- 田植後15日～30日（ノビエ3.5葉期）
- 使用回数：1回

裏面は雑草図鑑 タネツケバナ・スズメノテッポウを掲載しています。